

「神の国の種」

マルコの福音書 4:26～29

はじめに

マルコの福音書 4 章には、イエシュアが「種」を用いて語られたたとえ話が大きく分けて三つ記されていますが、今日はその二つ目にあたります。これは一つ目の「種蒔きのたとえ」よりもずっと短い内容ですが、それに引けを取らないほどの情報量があり、神のご計画の完成「神の国」についての情報がぎっしりと詰まったものとなっています。それでは早速見てまいりましょう。

【新改訳 2017】マルコの福音書

4:26 またイエスは言われた。「神の国はこのようなものです。人が地に種を蒔くと、

4:27 夜昼、寝たり起きたりしているうちに種は芽を出して育ちますが、どのようにしてそうなるのか、その人は知りません。

1. 地に

「神の国はこのようなものです」とあるように、ここで語られているたとえは間違いなく「神の国」についての説明であり、私たち人が何を成し、どう生きるべきかを説いたものではないことを覚えなければなりません。そしてそれが実際に、いつ、どのようにして起こるのが示されたたとえであると考えられます。

まず「人が地に種を蒔く」ということから、「神の国」は「地に」現れる、建てられるものであるということが表されていると考えられます。それは一般的に考えられているような天国というものとは全く異なり、私たちが今いるこの地上に実現するものであるということです。なぜなら「天にいます私たちの父」と唱えられるように、神はすでに天におられ、そしてそこにご自身の王座を据え、無数の御使いたちがこれに仕えており、いわゆる「天国」はすでに国として成り立っている、完成しているからです。イエシュアがもしこの「天国」を指してこれからそれがどのように成っていくのかを説明してこのたとえを話しておられるとすれば、それは非常におかしなもの、不自然で無意味なものとなってしまいます。神は天と地を創造されました（創世記 1:1）。ですから神が何かを成されるとすればそれはこの天と地の二つのうちの両方、あるいはそのどちらかしかないということです。ですから神がこれから御自身の国を建てられるとすれば、それはこの「地に」しかないというのは非常に自然な考え方だと思われ

2. 王国

また「神の国」はヘブル語で「マルフト(מַלְכוּת) ハ エローヒーム(הַאֱלֹהִים)」と言いますが、エローヒームとは「神」、そしてマルフトは「王国」という意味で、「神の国」は正確には「神の王国」です。この「王国」とはどのようなものか、マルフトという言葉の最初の言及から考えてみたいと思います。

【新改訳 2017】民数記

24:5 なんとすばらしいことよ。ヤコブよ、あなたの天幕は、イスラエルよ、あなたの住まいは。

24:6 それは、広がる谷のよう、また川のほとりの園のようだ。【主】が植えたアロエのよう、また水辺の杉の木のようにだ。

24:7 その手桶からは水があふれ、種は豊かな水に潤う。王はアガグよりも高くなり、王国は高く上げられる。

これはバラムの語った「ヤコブ」すなわち「イスラエル」の民に対する預言の言葉です。彼は異教の占い師でしたが、神の霊によってこれらの言葉を語りました。そしてその「王国は高く上げられる」と語り、ここに聖書で最初のマルフォートがあります。このようにマルフォートとは本来、イスラエルの民を指し示した言葉であると言えます。そしてそのイスラエルの「王はアガグよりも高くなり」ともありますが、この王とはもちろんメシアであるイエシュアのことであり、そして「アガグ(אגג)」とはイスラエルの敵を象徴する名であると考えられます。実際にエステル記でイスラエルの民、ユダヤ人を絶滅させようとした人物に「アガグ人」ハマンという人がいます。またそれはエゼキエル書 38 章で預言されている「多くの年月の後」すなわち終わりの日にイスラエルを侵略しようとする「ゴグ(גוג)」の語源であるとも考えられ、そして究極的には黙示録 13 章に記された「獣」と呼ばれる反キリストを指し示した名であると考えられます。イエシュアはこの「獣」を打ち滅ぼし、イスラエルの王となられ、そしてその「王国は高く上げられる」すなわち「神の国」となる、という神のご計画がこのマルフォートという言葉に本来指し示された意味、神のご計画であると考えられます。

3. 種

そしてイエシュアはまたしても「種」を用いてたとえを話し始められます。先ほどの民数記 24:7 にも「種は豊かな水に潤う」とあり、「種」は神の「王国」となるイスラエルの民を指し示す言葉であると考えられます。なぜなら「種」を意味するヘブル語のゼラ(זר)は、その最初の言及である創世記 1:11

【新改訳 2017】創世記

1:11 神は仰せられた。「地は植物を、種のできる草や、種の入った実を結ぶ果樹を、種類ごとに地の上に芽生えさせよ。」すると、そのようになった。

という記述から本来、地上における「増殖、子孫繁栄」の意味を持った、神の祝福を指し示した言葉であると考えられ、そして神はイスラエルの父祖であるアブラハム、イサク、そしてヤコブとその子孫に対してこのように約束されたからです。

【新改訳 2017】創世記

12:1 【主】はアブラムに言われた。「あなたは、あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れて、わたしが示す地へ行きなさい。

12:2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとする。あなたは祝福となりなさい。

26:2 【主】はイサクに現れて言われた。

26:4 …あなたの子孫を空の星のように増し加え、あなたの子孫に、これらの国々をみな与える。あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。

28:13 …わたしは、あなたの父アブラハムの神、イサクの神、【主】である。わたしは、あなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫に与える。

28:14 あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西へ、東へ、北へ、南へと広がり、地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。

このように神はアブラハム、イサク、ヤコブすなわちイスラエルとその子孫に対して、この地上における「祝福」すなわち「空の星のように」また「地のちりのように」「増殖、子孫繁栄」することを約束しておられるのです。またそれだけでなく、彼らによって「地のすべての部族」が祝福されるというご計画であることも明示されています。これがゼラ「種」という言葉に指し示された「神の国」のご計画であると考えられ、イエシュアが「神の国」のたとえにこれを多用される理由であると考えられます。

4. 夜昼

そしてこの地に蒔かれた「種」すなわち地上における「神の国」は、「夜昼、寝たり起きたりしているうちに…芽を出して育ちます。どのようにしてそうなるのか、その人は知りません。」とあります。この日本語の訳では、「種」の意味がたとえ何であろうと、蒔いた人は「種」について一切関知していないという意味に受け取れてしまいます。しかし蒔いた「その人」が神ご自身を表しており、「種」が「神の国」を指し示しているのならば、神がこれを関知しておられないはずがありません。ですからこのたとえはヘブル語の視点で、注意深く読み取る必要があると思われる。

まず「夜昼、寝たり起きたりしているうちに」というたとえについて考えます。「夜昼」ですから「夜」が先で「昼」は後です。この順番にも意味があると考えられます。「夜」を意味するライラー(לילה)、そして「昼」ヨーム(יום)、これらの最初の言及は創世記 1:5 です。

【新改訳 2017】創世記

1:3 神は仰せられた。「光、あれ。」すると光があった。

1:4 神は光を良しと見られた。神は光と闇を分けられた。

1:5 神は光を昼と名づけ、闇を夜と名づけられた。夕があり、朝があった。第一日。

このように、「夜」は本来「闇」、「昼」は「光」であったことがわかります。神は「光」に目を留められ、これを「良しと見られ」ましたが、「闇」についてはそうなさいませんでした。そして「神は光と闇を分けられた」とあります。ですから「夜昼」というたとえには、神がご自分のものとそうでないもの

とを分けられる、区別される、すなわち**神の裁きの時**が指し示されていると考えられます。そしてその裁きが現実となって起こるその時、今のこの暗闇の支配の時代は終わり、神の光の支配の時代が訪れるのです。この流れ、順序が「**夜昼**」というたとえに表されていると考えられます。

5. 寝たり起きたり

そして「**寝たり起きたりしているうちに**」という文の中に「寝る」という意味のシャーハヴ(נָשָׁן)と「起きる」という意味のクーム(קוּם)がありますが、それぞれの最初の言及を見てみましょう。

【新改訳 2017】創世記

19:4 彼らが**床につかないうちに**、その町の男たち、ソドムの男たちが若い者から年寄りまで、その家を取り囲んだ。すべての人が町の隅々からやって来た。

これは天から下った火によって滅ぼされた、ソドムの町の人々についての記述ですが、彼らは町にやってきた旅人（に扮した御使い）に暴行しようとして、夜「**床につかないうちに**」集まって来たという出来事です。ここに聖書で最初のシャーハヴがあり、この言葉には本来、「**すべての人が**」**神から遣わされた者を襲う出来事、行為**が指し示されていると考えられます。またクームについて。この最初の言及は創世記 4:8 です。

【新改訳 2017】創世記

4:8 カインは弟アベルを誘い出した。二人が野にいたとき、カインは弟アベルに**襲いかかって**殺した。

これは最初の人アダムの子カインとアベルの出来事ですが、カインは弟アベルだけが神に目を留められたことに怒り、彼を殺してしまいます。ここに「**襲いかかって**」と訳されているのが聖書で最初のクームです。ですからクームには本来、**神に選ばれた者を殺すという行為**が指し示されていると考えられます。ですからこの「**寝たり起きたりしているうちに**」というたとえには、神から遣わされた、神に選ばれた人を**集団で襲って殺すという行為**が表されていると考えられ、その出来事とは**イエシュアの十字架の死**であると考えられます。

6. 芽を出して育つ

次に「**種は芽を出して育ちますが、どのようにしてそうなるのか、その人は知りません。**」というたとえについてですが、まず「**芽を出して育ち**」という箇所には「芽を出す」という意味のツァーマハ(נִמְצָה)と、「大きくなる」という意味のガーダル(גָּדַל)が使われており、それぞれの最初の言及を見てみますと、ツァーマハは創世記 2:5 で天地創造の初め、神がまだ地上に草木を芽生えさせておられなかった、まるで死んだような世界を指し示しており、一方ガーダルの最初の言及は先ほども取り上げた創世記 12:2 のアブラハム「**を大いなるものとする**」という神の約束を指し示しています。ですからこの「**種は芽を出して育ちます**」というたとえには、**滅ぼされ、死んだような状態のイスラエルが、やがて大いなる国民、「神の国」の民となる**という神のご計画が表されていると考えられます。

また「**どのようにしてそうなるのか、その人は知りません**」という表現についてですが、これは「種」を蒔いた「**その人**」すなわち神が「**知りません**。」ということになるのですが、全知全能の神が知らないとは一体どういうことでしょうか。ここに使われている「知る、認識する、知覚する」という意味のヤーダ(יָדָה)の、その本来の指し示す意味から考えてみたいと思います。

【新改訳 2017】創世記

3:5 それを食べるそのとき、目が開かれて、あなたがたが神のようになって善悪を知る者となることを、神は知っているのです。

これはエデンの園にあった善悪の知識の木についてのものですが、この木の実を食べる者がどうなってしまうのかを「神は知っている」という箇所にも、聖書で最初のヤーダが使われています。神が「知っている」こと、それは人の「**目が開かれて、神のようになって善悪を知る者となること**」です。すなわち人が神を神とせず、自分自身を神とし、その思うところに従って物事を判断し、自分勝手に生きること、つまり神に聞き従わない者となること、すなわち「罪」です。このようにヤーダとは本来、神が人の中に「罪」の存在を認める、認識するということを指し示した言葉であると考えられます。ですから「(どのようにしてそうなるのか、) **その人は知りません**」という表現には、**神が人の中に罪を認めないこと、つまり人がその罪を赦されたこと**が表されていると考えられます。つまり「**夜昼、寝たり起きたりしているうちに種は芽を出して育ちますが、どのようにしてそうなるのか、その人は知りません**。」というたとえには、**神の裁きの時、イエシュアの十字架の死によってその罪を赦されたイスラエルの民はやがて回復し、大いなる国民となり、もう二度と罪を犯さなくなる**という出来事、「**神の国**」のご計画の完成が表されていると考えられます。

そしてさらにこのたとえは以下のように付け加えられています。

【新改訳 2017】マルコの福音書

4:28 地はひとりでに実をならせ、初めに苗、次に穂、次に多くの実が穂にできます。

4:29 実が熟すと、すぐに鎌を入れます。収穫の時が来たからです。」

7. エデンの回復

「**地はひとりでに実をならせ**」とあり、天ではなく「**地**」、この地上に神のご計画の完成である「**神の国**」が建てられることが再度強調されていると考えられます。同様に「**苗**」と訳されているデシェ(דֶשֶׁה)もまたその最初の言及である創世記 1:11 を見ますと「**地**」に生じることが指し示された言葉であると思われます。次に「**穂**」とありますが、これはシッボレト(שִׁבֹּלֶת)と言い、本来創世記 41:5 に記されたエジプトの王ファラオが見た夢に出てきた「よく実った七つの良い穂」を指し示しており、この夢はヤコブの子ヨセフによって解き明かされ「**七年間の大豊作**」を指し示していることが記されています(創世記 41:29)。そしてこの大豊作は「**量りきれないほどの**」ものであったことが記されています(創世記 41:49)。その「**穂**」にさらに「**多くの実が穂にでき**」るとたとえられています。考えてみてください。この「**穂**」シッボレト一つだけでも「**量りきれないほどの**」豊かさを表しているのです。それ

にさらに加えて「**多くの実が穂にできます**」とは一体どれほどの豊かさが、この地上にあふれるのでしょうか。これは数々の天災や人災に悩まされる今の不安定な地球環境では到底考えられないほどのものでしょう。しかしそれはかつてこの地上が「エデン」と呼ばれていた頃に回復されるということであり、創世記 1:31 に記された「見よ、それは非常に良かった。」と神が言われた状態に戻ることであります。その事実がこの「**地はひとりでに実をならせ、初めに苗、次に穂、次に多くの実が穂にできます。**」というたとえには表されているのだと考えられます。このように「**神の国**」とは人類だけでなく、地球環境全体にまで及ぶ壮大なものであるということが表されていると考えられます。

8. 収穫の時

そして「**実が熟すと、すぐに鎌を入れます。収穫の時が来たからです。**」というたとえについて。まず「**熟す**」という意味のガーマル(גָּמַל)、これは創世記 21:8 にその最初の言及があります。

【新改訳 2017】創世記

21:8 その子は育てて**乳離れした**。アブラハムはイサクの**乳離れの日**に、盛大な宴会を催した。
21:9 サラは、エジプトの女ハガルがアブラハムに産んだ子が、イサクをからかっているのを見た。
21:10 それで、アブラハムに言った。「この女奴隷とその子を追い出してください。この女奴隷の子は、私の子イサクとともに跡取りになるべきではないのですから。」

これはアブラハムの子イサクが「**乳離れした**」時の出来事です。ここに聖書で最初のガーマルがあります。この時にある事件が起こります。アブラハムの妻「サラ」が「エジプトの女ハガルがアブラハムに産んだ子」を見てこれは「イサクとともに跡取りになるべきではない」と言って「追い出してください。」と言い出したのです。そして結果的にこのハガルとその子は家から追い出されてしまいます。ですからガーマルには本来、跡取りになるべきではない者が追い出される、というような出来事が指し示されていると考えられ、これは「**神の国**」が建てられるその時、そこに入るべきでない者、すなわち神を、イエシュアを信じない、聞き従わない者は追い出されること、つまり滅ぼされることが表されていると考えられ、それが「**実が熟す**」というたとえに表された神のご計画であると考えられます。

そして「**実が熟すと、すぐに鎌を入れます。**」ともあり、この「**鎌**」のことをマッガール(מִגְדָּל)と云うのですがこれは本来、バビロンの奴隷となり、後に解放されて故郷に帰る民の姿を指し示す言葉であることが、その最初の言及からわかります。

【新改訳 2017】エレミヤ書

50:16 種を蒔く者や、刈り入れの時に**鎌**を取る者を、バビロンから断ち切れ。虐げる者の剣を避けて、人はそれぞれ自分の民のもとに帰り、自分の土地へ逃げて行く。

「**バビロン**」は終わりの時代に神に敵対する都、勢力の象徴として黙示録にもその名が記されている存在です（黙示録 14:8、16:19、17:5、18:2、10、21）。ですからこの預言はエズラ記に記されたバビ

ロン捕囚からの帰還を果たしたイスラエルの民についての歴史的事実を示したのではなく、やがてイエシュアがこの地上に再臨され、サタンと悪霊どもを捕らえ、「バビロン」に象徴された神に逆らう全ての者を滅ぼされることと、同時にご自分の民であるイスラエルの民を世界中から呼び集めてイスラエルの地に帰還させるというご計画を指し示したものであると考えられます。このように「鎌」マツガールには「神の国」の民としてのイスラエルが指し示されていると考えられ、また「(鎌を) 入れます」という箇所に使われている「遣わす、送る」という意味のシャーラハ(חַלַּץ)は本来、その最初の言及である創世記 3:22 から、永遠のいのちの木に「手を伸ばし」、永遠に生きようになることを示した言葉であると考えられるため、「すぐに鎌を入れます」というこのたとえには、「神の国」の民としてのイスラエルに永遠のいのちが与えられること、「神の国」が永遠のものであることが表されていると考えられます。ちなみに「すぐに」と訳されたヘブル語のマーハル(מַהֲרָה)は本来、創世記 18:6 で神がアブラハムのもとに来られた出来事を指し示しており、これは終わりの日にイエシュアがイスラエルの地に再臨されることを指し示した言葉であると考えられます。ですから「神の国」のご計画はイエシュアがこの地に再び来られ、イエシュアによって成し遂げられるというものであるということです。つまりこの「収穫の時」とはイエシュアの地上再臨を指し示したたとえであると考えられます。

今日のたとえは、イスラエルを中心として「神の国」がこの地上に建てられるものであること、そしてイエシュアの十字架の死によって罪が赦された者だけがそこに入ることができるということが表されており、またこの「神の国」がいかに壮大で恵み豊かな世界であるかということ、そしてそれはイエシュアがこの地上に再臨され、神に敵対する勢力をすべて地上から一掃することでもあるということが表されたものであるという結論に至りました。このように、短いたとえの中にも「神の国」についての情報がぎっしりと詰まっており、このたとえ自体そのものがまさに「種」と呼べるような性質、特徴を持っていると言えます。

手品師はめったに「種明かし」をしません。私はこれからもこのような聖書に記された神の御業の「種明かし」をさせていただきたいと思います。語る者にも聞く者にも等しく聖霊の助けがありますように。